

2016.11.6 年間第3 2主日

人はみな復活する、アブラハムも生きている

ルカ 20章 27-38節

さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

説教

まだ11月が始まったばかりですが、キリスト教の暦ではもう一年の終わりに近づいています。きょうから20日までの3回の主日を教会の伝統では「終末主日」と呼び「終わり」(世の終わり、あるいは、個人の終わりである死)について思いをはせる時としています。

きょうの福音は復活についてのサドカイ派とイエスの問答です。エルサレムに到着したイエスは神殿で活動を始め、当時の宗教的指導者たちと論争しました。イエスと彼らとの対立は深まっています。

<復活とは一体何なのか>

サドカイ派の人々は復活は律法に矛盾するからありえないといいます。七人の夫に死に別れ、その都度再婚した女性を例にあげます。復活した女はいったい誰の夫になるのか、七人の夫を前にした女は復活後どうするのか、どうなるのか、とサドカイ派は主張します。たしかに、復活を信じる人は復活したら愛する人に再会できるという希望があります。また愛する人を失った人の慰めは、いずれ自分も死に、そして復活して再会できる慰めがあります。それはこの世の人間関係や、社会関係が、復活のあとも続くという考えが前提になっています。しかし、イエスは死者の復活する世はこの世の続きではないとはっきりと否定します。

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」 20:34-35

この世では結婚するが、復活後の世では結婚はしない。（この世と次の世は違っている）このようにイエスは復活を説明してサドカイ派を否定し、復活はあると主張します。

<復活を望む人、望まない人>

恵まれた境遇にある人々は死んだ後もそのままの状況が続けばいい、と望むかもしれません。つくり話でしょうが、アメリカの成功者で金持ちの人たちはふつうの埋葬ではなく、シェルターの中に冷凍保存した状態で葬られることを希望しているそうです。現代風のピラミッドに眠り、成功者はそのままの姿かたちで復活するつもりなのかもしれませんが、なんとも鬱々とした気分になります。

いつの世でも恵まれていない人、不幸な人の方が大多数です。たしかに、復活しても以前と変わらないのであれば、だれがそれを待ち望むでしょうか。犯罪者が、破産者が、障害者が、自殺者が…この世で多くのマイナスを背合わされた人がそのままの姿での復活を待ち望む気持ちにはならないのでは

ないでしょうか。はっきりいえば復活したくないでしょう。しかし、イエスは復活は、この世の延長ではないとはっきりと言っています。このことばは救いのみことばです。

この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。20:36

<復活の希望>

私たちは死後の世界を普通の意味で知ること、認識することはできません。復活とは未知の領域です。復活を他人事として「あーだこーだ」ということはできるかもしれませんが。しかし復活を自分の問題として、また身近な人のこととして考え出すとわたしは目がまわります。死後の世界についてはいろんなことを言う人はいます。キリスト教の中でもさまざまな主張があります。

(注1)

イエスはきょうの福音で復活した次の世は、この世の延長ではないと言っています。言い換えれば、そこは人間の思いではなく、神の思いによって支配される世界だということです。そうした状態に入ること、復活という希望をイエスにご自分の受難と栄光「十字架と復活」を通して私たちに伝えていきます。そのような大きな希望を約束してくださった主に感謝し、きょうの主日を「終わり」についてそれぞれに思いを馳せてみましょう。

注1：キリスト教における救いの範囲

「すべての人が復活する」とキリスト教は信じます。そして復活の後に永遠のいのちに入るもの、入らないものに裁かれます。ここまではキリスト教なら同じ考えです。

ここから理屈の上で神学は3種類の救い（永遠のいのち）の範囲を考えています。

- 1) 誰もが救われる。
- 2) 信じたものが救われる。
- 3) 選ばれたものが救われる。

このように、同じ解釈、同じ答え、とならない問題として「救い」に関する神学の論議は今も続いています。
